

サロベツ稚咲内砂丘林が育む命

～砂丘林はなぜ大事？

開会 14:30 (開場 14:00-)

講演 14:35-15:15

稚咲内砂丘林の自然と開発事業による影響

長谷部真 (サロベツ・エコ・ネットワーク 生物環境保全部)

15:15-15:45 稚咲内砂丘林再生活動

～よみがえれ！みんなの砂丘林！～

吉原努 (サロベツ・エコ・ネットワーク 地域環境教育部)

質疑 15:45-16:00

閉会 16:00

令和3年2月27日(土) 14:30-16:00

豊富町定住支援センター＋オンライン

主催：サロベツ・エコ・ネットワーク

後援：豊富町 ほっくー基金助成事業

講演要旨

砂丘林の自然と開発事業による影響

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク 長谷部真

稚咲内砂丘林(以後砂丘林)は7000年前にサロベツが海だった頃、海岸に砂が堆積してサロベツ湾を礁湖にしたことで生まれ、サロベツ湿原の形成の原動力になりました。砂丘林は南北30km、東西に最大で1.7kmに帯状に広がり、ミズナラやトマツの針広混交林の間に大小100以上の湖沼が点在し、哺乳類20種、鳥類70種、両生類3種、爬虫類3種、魚類8種、昆虫類660種、底生動物47種、植物309種が確認されており、その多くが国立公園に指定されています。

砂丘林には日本でここでしか繁殖していないミコアイサ、北海道のみで少数が繁殖するアカエリカイツブリ、全国的に激減し北海道で少数が繁殖するアカモズ、北海道で少数が繁殖するオジロワシ、東北以北で繁殖するクマガラ等の希少鳥類が生息しています。これらの鳥類の繁殖状況はあまり明らかになっていないため、鳥類調査を2020年6-7月と2021年1-3月(継続中)に行いました。

その結果、ミコアイサ3つがい、アカエリカイツブリ4つがいを確認し、アカモズは確認されませんでした(オジロワシとクマガラは調査中)。水鳥であるミコアイサやアカエリカイツブリにとって沼の水位の低下は捕食者からの隠れ場所を確保できなくなるため、大きな影響が懸念されます。

また、砂丘林では周辺に張り巡らされた排水路による乾燥化や砂の採取による砂丘林自体の消失が起こってきました。これらの現状を把握するために、踏査により湖沼群の推移低下の現状や森林の立ち枯れ、砂の採取状況を踏査とドローンを用いた動画の撮影により2020年6月に行いました。以上の調査はほく一基金の助成金を利用して行いました。

また砂丘林のうち幌延町には砂丘林や海岸砂丘でありながら穴が空いたように国立公園から除外された地域があります。このうち音類(オトンレイ)地区ではすでに風車が設置されており砂の採取により、国立公園外の砂丘林は1箇所のみが残っているだけでした。湖沼はほぼ消失しており、砂を採取した林縁部の一部では立ち枯れが起こっていました。その北にある浜里地区でも国立公園外における砂丘林の砂の採取が実際おこなわれており、砂丘林は1箇所を除いて消失していました。国立公園の際でも実際に砂が採取中であり、隣接する湖沼の多くはすでに消失または大幅に面積が縮小していました。砂の採取地は砂丘林側から水が染み出し沼のようになっており、隣接する国立公園側の沼の水位低下が懸念されました。また、多くの場所で砂採取地の林縁部で森林の立ち枯れが起こっていました。砂採取跡地では風力発電施設が建設中であり、稼働した場合渡り経路として砂丘林を利用する鳥類や繁殖する希少鳥類への影響が懸念されます。また、風力発電施設が設置されることにより、何も無い広大な空が魅力のサロベツ湿原の景観への影響が大きく懸念されます。

砂丘林と湖沼群、そこに生息する希少鳥類を中心とする野生生物と酪農との共存のためには、まず、それらの生物の生態を明らかにし、サロベツ湿原と同様に砂丘林と周辺との間に緩衝帯を設け、水位低下や森林の立ち枯れ等の影響を最小限にとどめることと、牧草地と砂丘をうまく織り交ぜて共存させ、失われた砂丘林の再生を行うことが求められます。

稚咲内砂丘林再生活動
～よみがえれ！みんなの砂丘林！～
(NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)
吉原 努

稚咲内砂丘林はサロベツ湿原の西側、海岸線に沿って南北に 30 km 以上に渡って連なる帯状の森林帯です。数列の砂丘の上に約 4,000 年かけて森林が成立し、砂丘間には大小 170 以上の湖沼や湿地が点在しており、ミコアイサの国内唯一の繁殖地となっています。その特異な自然景観の他、豊かな生態系を育んでいる貴重な場所となっていることから、国立公園の特別保護地区にも指定されています。

しかし、海岸線に近い一部の森では、過去に放牧が行われていたことその他、長年に渡る風雪の影響が原因で約 3ha ほど裸地になってしまった場所があり、地域住民や各行政機関が協力して植樹活動を展開しています。

2005 年から始まった稚咲内砂丘林再生活動は、最初の 2 年間は現地産のミズナラ種子を採集して直接播種していましたが、土壌が保水性の乏しい砂地であることや、海からの潮風が直撃する厳しい自然環境のため、17,000 個もの種子は全滅してしまいました。そのため、2008 年から植樹地の近くに苗畑を設け、シードトラップを用いて良質な種を集め、数年間かけて苗木を育てて植樹する方法に切り替えました。2012 年には優先して植樹すべき区域の全域で植樹を終えることができ、2864 本の苗木が順調に生育しています。現在はその周辺部において新たな植樹が始まっています。

植樹したミズナラが育ち森になるまでには長い年月がかかります。植樹している土地は過酷な自然環境であるため成長も遅く、簡単には進みません。当面は周囲の草本より樹高が高くなるまで継続的な下草刈りなど日々の維持管理作業が必要となります。また、当該地域以外でも裸地化した場所があるため、そういった箇所を見つけて植樹活動を展開し、かつては生い茂っていたミズナラ林を再生していきたいと考えています。